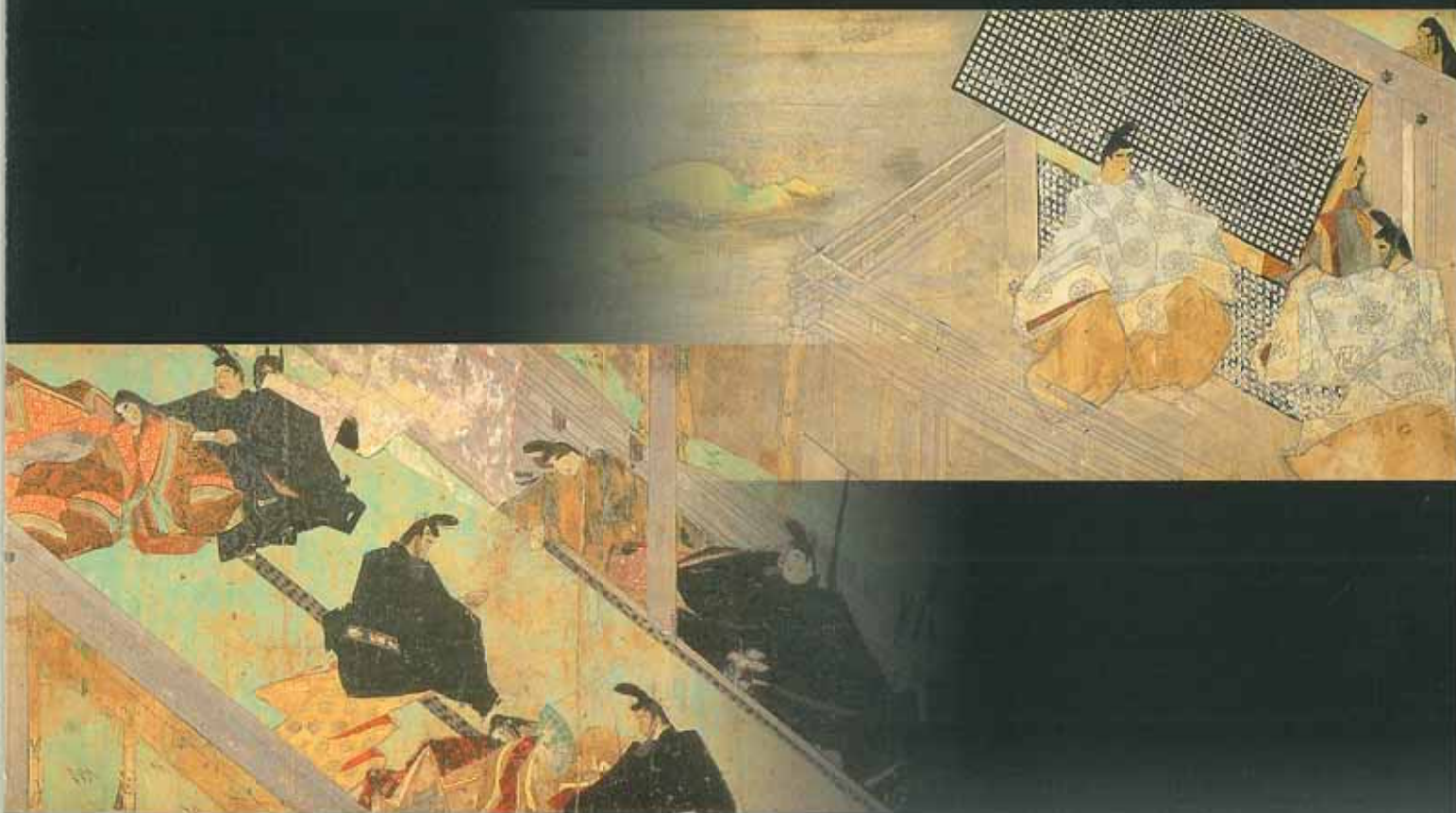


名古屋市博物館開館30周年記念特別展



茶人のまなざし

— 森川如春庵の世界 —



第1章

如春庵森川勘一郎の人と交友

如春庵(1887~1980)は三井財閥の総帥益田鈍翁(1847~1938)や原三溪(1868~1939)など、当時の日本を代表する財界人であり文化人であった人々と交流を結び、たびたび名古屋に彼らを招いて大茶会を催しました。名古屋を東京や京都を凌ぐ日本一の文化都市にすることが如春庵の願いであったといえます。

彼らに倣って美術品の蒐集につとめるかたわら、自らも書画をたしなみ、さらには作陶を手がけ、鈍翁との合作をはじめ、数々の自作楽茶碗を遺しました。

この章では、如春庵と交流のあった益田鈍翁、原三溪の作品、また、如春庵自らの作品とそれらにまつわるエピソードなどを併せてご紹介します。



森川如春庵画像
バーナード・リーチ(1887~1979)筆
昭和41年(1966)
名古屋市博物館蔵



手形(流水蛇羅文釘隠・九七桐紋釘隠)
桃山時代
福岡美術館蔵



益田鈍翁画像
原三溪筆
昭和3年
名古屋市博物館蔵

原三溪が益田鈍翁を描いたもの。森川が懇願して譲り受け、鈍翁に賛を依頼した。



一行書「盧橘子低山雨壺」
益田鈍翁筆
昭和3年
名古屋市博物館蔵

源氏物語鈴虫図
田中頼美(1875~1875)模写
昭和
名古屋市博物館蔵

第2章

蒐集よもやまばなし

如春庵は、古美術蒐集家の誰もが望んだように、後世「森川本」と呼ばれるような天下の名品を手中にしたいと願っていました。美術品はいつまでも一人のもとにとどまるものではなく、いつかは別の数寄者のもとに行き、その目を楽しませるものだと達観していた如春庵は、そうであるが故に、なおさら「森川本」の名を求めたようです。

そのために名品の獲得には努力を惜しまなかったとともに、強運にも恵まれていました。

如春庵の美術品蒐集にまつわるさまざまなエピソードには、如春庵の美術品に対する執念のようなもの、あるいは近代の新しい美意識の変遷が見え隠れします。



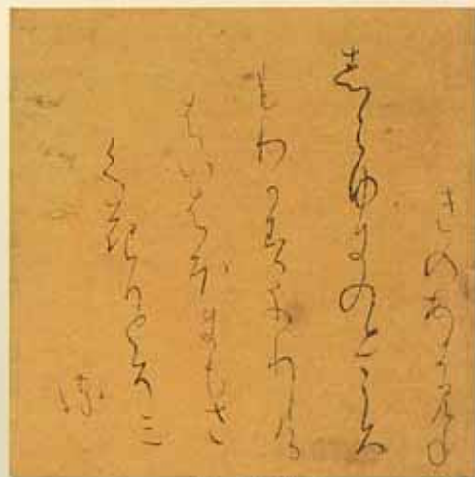
重要美術品 伝仏鬼軍絵巻折簡
鎌倉時代
個人蔵

昭和6年、純斎を招いた茶会で使用したもの。



国宝 紫式部日記絵詞 第二段
画・伝藤原信実筆 詞書・伝後京極良経筆
鎌倉時代
五島美術館蔵

大正8年頃、如春庵は五段からなる「紫式部日記絵詞」1巻を苦心の末に入手した。これは写しでしか知られていなかったまぼろしの名品で、この発見により、この巻には「森川本」の名が冠せられたのである。



重要文化財 古今和歌集折簡 寸松庵色紙「しらゆきの…」
平安時代
個人蔵



重要文化財 佐竹本三十六歌仙切「柿本人麿」
画・伝藤原信実筆 詞書・伝後京極良経筆
鎌倉時代
出光美術館蔵

佐竹本三十六歌仙絵巻が大正8年に三十七枚に切断された。この時に行われたく引きで、巻頭の「柿本人麿」を引き当てる幸運にも恵まれ、茶人如春庵の名はますます高められていった。

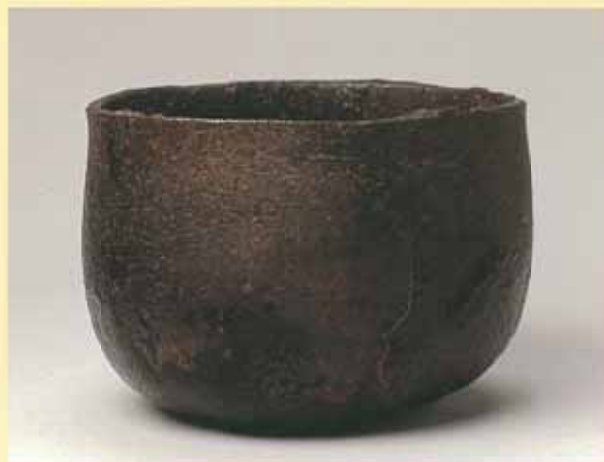
第3章

如春庵と茶湯

茶人としての如春庵は、表千家の流れをくむ久田流を学びながら、一方では一流一派にこだわらない、新しい茶の湯を目指したことも知られています。明治28年(1895)、鈍翁の提唱により、古美術品鑑賞を主眼とした「大師会」が始まりました。これに触発され、名古屋の地にも新しい茶の湯の文化が芽生えました。その中心的な役割を果たした一人が如春庵です。如春庵の茶席には、自ら集めた茶道具の数々が披露されました。蒐集品の中には、武家の古文書や仏具など従来の茶の湯では使わないようなものまで含まれており、新しい取り合わせとしてこうした茶会に提案していったのではないかと想像されます。



折溜碗
宗旦在判
江戸時代前期
名古屋市博物館蔵



重要文化財 黒茶碗 銘「時雨」
本阿弥光悦(1558~1637)作
江戸時代前期
名古屋市博物館蔵

茶碗「時雨」は、森川が16歳の頃に祖父より貰い与えられたものといわれ、森川の実用品蒐集第一号である。森川のもとには「時雨」のほかにもう1点、光悦の茶碗があった。赤茶の茶碗「乙御前」である。夫婦のように寄り添って森川のもとにあったが、故あって「乙御前」は森川の手元を離れた。今頃久々の再会になる。



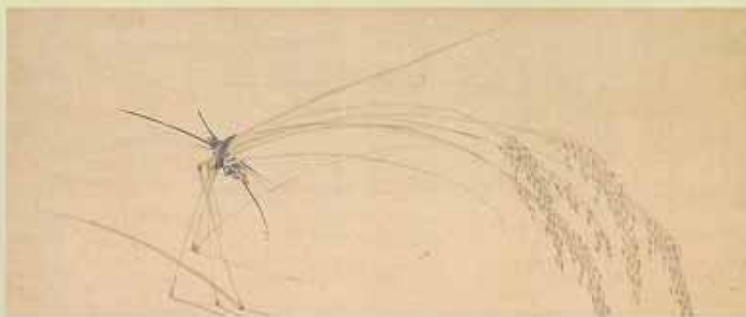
赤茶碗 銘「乙御前」
本阿弥光悦作
江戸時代前期
個人蔵



茶杓
古田織部(1543~1615)作
江戸時代前期
名古屋市博物館蔵



瀬戸黒茶碗 銘「小原女」
桃山時代
個人蔵



稲之図
伍任月山(1260~1290)筆
名古屋市博物館蔵

如春庵森川勘一郎の名は、益田鈍翁らとともに佐竹本三十六歌仙
 絵巻の切断に立ち会い、巻頭の「柿本人麿」を引き当てた人物として、
 あるいは今は切断されてそれぞれ国宝や重要文化財に指定されている
 紫式部日記絵詞の発見者として知られています。また本阿弥光悦にあ
 こがれ、光悦作の茶碗「時雨」を所持していたことは、後世森川の名を
 最も高からしめました。

この「時雨」を含む如春庵蒐集品188件211点は、昭和42年、43年の
 二度にわたって名古屋城に寄贈され、平成18年2月16日に一括して名
 古屋市博物館に移されました。

本展覧会はこの移管を機に、寄贈資料だけでなく、昭和の大茶人で
 あり、古美術品蒐集家であった如春庵がかつては所持し、今は他所にあっ
 てそれぞれ高い評価を得ている茶道具・美術品を一堂に会し、如春庵
 蒐集の精華を再現しようとするものです。



国宝 志野茶碗 銘「卯の花塙」
 桃山時代
 三井記念美術館蔵

森川が自ら刊行した「志野・黄瀬戸・瀬戸」の巻頭を飾る国宝茶碗である。

森川如春庵

本名 森川勘一郎 明治20年(1887)～昭和55年(1980)
尾張一宮の大地主、森川家の当主。大正元年より村議会議員を歴任。
如春庵は近代を代表する文化人として知られ、中京を代表する数寄者である。生涯に三千回を越す茶事を催したといわれている。
愛知一中在籍中には早くも本阿弥光悦の「時雨」を所持し、その後も国宝紫式部日記絵詞を発見するなど当代一の目利として知られる。

開催概要

会 場：名古屋市博物館(〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1)
会 期：平成20年3月1日(土)～4月13日(日)
開館時間：9時30分～17時(入場は16時30分まで)
休 館 日：毎週月曜日と第4火曜日
観 覧 料：一般1,200円 高大生800円 小中生400円
主 催：名古屋市博物館、NHK名古屋放送局、NHK中部ブレイズ、中日新聞社
後 援：愛知・岐阜・三重県教育委員会

お問い合わせ

名古屋市博物館 電話 052-853-2655(9:00～17:30)
休館日 電話 052-853-2658

表紙：唐物茶壺 清香 名古屋市博物館蔵
国宝 紫式部日記絵詞 第一段、第四段 五島美術館蔵
重要文化財 黒染茶碗 銘「時雨」 名古屋市博物館蔵

